

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：13802

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21792207

研究課題名（和文） 外来化学療法を受ける進行がん患者の適応に至るプロセス

研究課題名（英文） Process of adaptation for advanced cancer patients receiving outpatient chemotherapy

研究代表者

佐藤 直美（SATO NAOMI）

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：10293630

研究成果の概要（和文）：対象者は、がんの診断や再発の診断に際し、[どこか人ごとでぴんと来ない]ながらも、[やらざるを得ない]という感覚で、外来化学療法を開始していた。そして [やるからには望みをつなぎたい] [まだ生きたい] という思いを徐々に強くしていった。治療の副作用からの不快感や、症状の進行による入院治療を経験しながら、[まだ何とかやれている] 感覚を維持していた。しかし一方で、治療を主軸に生活していくことに心の揺れを感じ、日常性を維持するために努力することで折り合いをつけている側面もあった。

研究成果の概要（英文）：Subjects felt that it was no concern of their own about their diagnosis of cancer or recurrence. They had no choice but to start receiving chemotherapy. Their hope to live kept going or even grew up. The feeling that they can manage their daily life was important, but sometimes they wavered on their therapy-centered life. They tried to keep usual daily life to settle that matter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：臨床看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：外来化学療法、進行がん患者、適応、質的研究、看護学、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

近年、がん患者に対する化学療法の場合は、入院（病棟）から外来へと移行してきている。患者にとっては、家族と共に過ごしなが仕事をして普段の生活をおくりたい、などの理

由で外来化学療法は希望の治療手段である一方で、副作用症状などが出現したときには、自ら判断や対応をしなければならず、その対応がうまくいかず強い不満をもつなど、看護支援の重要性が指摘されている。このような

背景から、外来化学療法を受ける患者に関する研究報告が増えてきている。外来で化学療法を受ける進行がん患者は、化学療法という治療そのものに起因する困難と、進行しているがんに向き合い、有限の生を意識することに伴う困難を感じ、何らかの対処行動を取りながら、何とか治療を継続していることが推測される。これらの患者は日々生活を送りながら、病を認識・実感し、困難を感じながらも対処し治療のために通院している。治療を始めてすぐには太刀打ちできないように感じられたことを何とか乗り越えていくことによって、あるところで、問題は無にはならないながらも、折り合いをつけ、治療が生活の一部となり、そこにプラスの意味さえ見出している、すなわち適応するところに到達するのではないかと考えられる。

片桐らが行った外来通院あるいは短期入院により、治療を継続しながら生活するがん患者の困難・要請と対処に関する研究を基礎に、射場らは外来または短期入院で治療を継続する中でがん患者が認識している困難・対処・適応の関係性について検討している。それによれば、困難は「病気や治療に伴う困難感」「治療環境の不備」の2因子、対処は「生活上の具体的な工夫」「病気への前向きな気持ち」の2因子、適応は「病気による人生の意味の深まり」の1因子が抽出され、その5因子間の関係性が構造方程式モデリングを用いて検討されている。この研究では、適応に関するモデルを前提に、関係する因子間の関係が探索された点で非常に意義のあるものであるが、時間依存性のある構成概念に対して横断的調査研究であったことが研究の限界として述べられている。外来化学療法を受ける患者が日々の生活の中で何を感じ、どのように対処しどのように折り合いをつけながら治療を伴う生活に適応しているかを

明らかにできれば、時期に合わせた予測的な看護介入も可能となると考えられる。しかし、上記の研究の他に適応に至るプロセスそのものに焦点をあてた研究はほとんどない。

2. 研究の目的

本研究では、外来化学療法を受ける進行がん患者が治療を受けながらの生活に適応するまでのプロセスを明らかにすることを目的とする。質的研究方法を用いて、化学療法開始直後から時間的経過と共に患者の体験を追い、治療を受けながらの生活に適応していると考えられるまでのプロセスを抽出する。またそこから、適応を促進するための看護援助について検討することも合わせて目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象者の選定

研究協力依頼施設は、外来化学療法室を有し、外来化学療法加算を受けている病院とした。診療科医師の協力を得て対象候補者を選定してもらい、研究者を紹介してもらった。対象者の選定条件は、成人患者で、進行がんの状態にあり、化学療法の目的が治癒でなく延命、症状緩和にあること、疾患名や病状、化学療法の目的等について医師から説明を受けていること、認知症や精神科的疾患がなく意識状態が清明で言語によるコミュニケーションが可能であること、化学療法を開始して1ヶ月以内にあること、1時間程度の会話が可能な身体状態であることとした。

(2) 調査方法

3ヶ月毎に縦断的に半構成的面接を行う質的研究の手法を用いた。研究対象候補者に、研究の目的、内容、倫理的配慮事項等について文書と口頭で説明し、文書にて同意を得た。

面接調査内容は、初回面接時、診断時からこれまでの経過、化学療法を開始するに当たっての医師からの説明に対する思い、化学療法を行っていることに対する思い、日常生活に対する思い、現在感じる困難と対処などで、2回目以降は化学療法を行っていることに対する思い、日常生活に対する思い、現在感じる困難と対処、前回面接時以降の自覚している変化などとした。なお、疾患名、治療歴、病状等医学的情報については対象者の許可を得て診療録より情報収集した。面接の際は、対象者の許可が得られた場合、ICレコーダーに録音し、許可が得られない場合はノートにメモを取り、面接終了後速やかに内容を記録した。

(3) 分析方法

録音またはノートに記録された会話を逐語録にした。逐語録と診療録から得られた情報を質的データとし、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に、外来化学療法を受ける進行がん患者の適応までのプロセスを明らかにするという目的のもと分析を行った。

(4) 倫理的配慮

本研究計画について、浜松医科大学医の倫理委員会の承認を得た後、研究協力依頼施設の診療科教授、看護部長、診療科医師に、研究の目的・方法を説明し協力の承諾を得た。対象候補者には文書と口頭で以下のことを説明し、理解を得た上で文書による研究参加の同意を得た。

- ・ 研究の目的、意義、方法
- ・ 研究への参加は自由であり、拒否しても診療等で不利益を被ることがないこと
- ・ 一度研究参加に同意しても、途中でや

めることもできること

- ・ 研究におけるデータの取り扱い
- ・ 対象者のプライバシーは保護され、匿名性が守られること
- ・ 面接実施において身体的・心理的状況に配慮すること
- ・ 研究の資金源としては、文部科学省科学研究費の補助を受けて行うこと
- ・ 研究協力に対する謝礼はないこと

対象候補者への心理的影響を考慮し、説明に当たっては、研究テーマ中の「進行がん患者」ということばを用いることは避け、「がん患者」と表現した。面接実施の過程で、負担を感じた場合に途中で同意を撤回する権利についても保障した。面接の最中、身体的状況には充分配慮し、万が一身体的不調を訴えた場合は、速やかに担当医師に連絡し対処すること、また、心理的な動揺等が見られた場合、状況によっては担当医師に連絡するなど適切に対処することを事前に説明した。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

4名の対象者から研究参加の同意を得て面接を行った。性別は男性3名、女性1名であった。年齢は50代1名、60代3名で、疾患の内訳は胃がん2名、肝細胞がん、膵臓がんが各1名であった。診断を受けてから初回面接時までの期間は3ヶ月から2年であった。

(2) 外来化学療法を受けながらの生活に適応していくプロセス

対象者は、がんという診断や再発の診断に際し、[どこか人ごとでぴんと来ない]という状況のなか、化学療法を勧められ、治療を開始するにあたって、実感がないながらも[やらざるを得ない]という感覚を持ち、しかし一方で[今後自分がどうなっているのか

()

研究者番号：

わからない]という強い不安も抱えていた。そして[やるからには望みをつなぎたい][まだ生きたい]という思いを徐々に強くしていった。食欲不振など治療の副作用からの不快感があったり、腹水の貯留による腹部膨満感、呼吸困難感といった症状の進行で入院治療を経験したりしながら、[まだ何とかやれている]感覚を維持していた。しかし一方で、治療を主軸に生活していくことに疑問や心の揺れを感じ、日常性を維持するために努力することで折り合いをつけている側面もあった。身体的状態が安定して保たれていることが外来化学療法を受けながら生活していくことの心理的適応をより促進していることが推測された。

看護者は、常に患者の治療状況をそれぞれのプロセスの中で捉える必要がある。治療を継続しても思うような効果が得られない場合や身体的状態が不安定な場合に、心の揺れが生じることが示唆された。患者に起きることを的確に捉え、予測的に早期の介入をし、患者の日常性が維持されるための援助に注目する必要性が示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 直美 (SATO NAOMI)

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：10293630

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者